

センタージャーナル

〒460-0016
名古屋市中区橋二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900

■発行人／荒山 淳
■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター



3月11日から18日まで開催された第22回平和展では、満州引揚のマンガ家らによる戦争体験のパネル・原画が展示された。

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを

真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

もくじ

- ・〈抄録〉お内仏のお給仕研修 ②・③
- ・研究員報告「第22回平和展」 ④・⑤
- ・ライブラリー紹介 ⑥
- ・研究生実習報告 ⑦
- ・INFORMATION ⑧

◆挟み込み(※寺報などにご利用ください)

罪悪深重

このたびの東北・関東大震災によりお亡くなりになられた皆様方に心より哀悼の意を表します。また、今、なお甚深悲歎の中、難儀な生活を強いられている皆様方に、心よりお見舞い申し上げます。

・津波の際、家にいたのは女性と子どもであったことから、女性と子どもの遺体が多い。

テレビでは映し出されない生の報告に言葉が失った。

あれから10日、被災地の特番の合間に、CMが流れはじめ、連続ドラマなどの放送も再開されつつある中、早くも徐々に平静を取り戻しつつあるようにも感ぜられる。

私の中に、「何かしなければ・・・」「何をすればいいのか・・・」という焦りの声が錯綜しながらも、無意識のうちに被災地の現状に眼を閉じ、耳を塞ぐ自分がいる。

復興にはこれから相当な歳月を費やさねばならぬはずである。これから、1ヶ月、1年、10年先までも被災者の悲痛な声を私は聞き続けることができるのだろうか。

思い返せば、阪神淡路大震災も能登半島地震も新潟県中越地震も未だ解決していない。それどころか、過去の戦争も未だ解決していないのに、忘れていく自分が浮かび上がってくる。

今、私にできることは、目をそらさず、被災者の声を聞き続け、つながりを感じ続ける場をもつこと。同期からの切実な生の声が、私に問いかけてくれた。
(教化センター主幹 荒山 淳)

それによると、
・とにかくガソリンがなく、被災地から遺体を運ぶにも運べない。
・原発事故によって、ボランティアはもろろんのこと公務員でも活動に相当な制限がかかり、慢性的な人手不足。
・市内全域に水がないため、遺体を洗うこともできず、その顔は泥と砂と血痕にまみれている。

お内仏のお給仕研修
名古屋別院主催
2011年1月31日

「お内仏のある生活」 一日のたしなみ

荒山 あらかやま 淳 じゆん
(教化センター主幹)

さる1月31日、名古屋別院主催による「お内仏のお給仕」研修が開催され、別院ゆかりのご門徒およそ50名が参加した。

講師は、荒山主幹(教化センター)が勤め、講義の後の座談会では、研究生が5班に分かれて、座談会の進行およびお内仏のお給仕についての話し合いが行われた。

今回の抄録は、座談会前の荒山主幹による講義の抄録を掲載させていただく。

「真宗門徒一人もあらじ」

私たちは、今日こうして真宗門徒としての暮らし、またはお内仏のお荘嚴の仕方を習おうと集ったわけです。自分は真宗門徒であるという自覚の上に、また、御先祖さまや先達の促しによる菩提心が、この場に身を運ばせてくれたことでしよう。しかし、その「真宗門徒」とは、一般的に言われるような、宗派の名前と



しての「真宗」という、または、一つの宗派の一員であるという意味での「真宗門徒」なのでしょうか。

昔、宗務総長をしておられた宮谷法合みやたにほうがん氏という方が「真宗門徒一人もあらじ」と語られました。

この言葉が、一体何を意味しているのかと言えば、「真宗」とは決して、他の宗派と区別しての名称ではなく、まさに、生きざま、生き方を「真宗」と名づけら

れているということです。「真宗」という生き方が始まらなかつたならば、私たちは人間になれない。唯一、この私人間になることのできる生き方を「真宗」と名付けられているのです。そして、私は本当にそのような生き方をしているのだろうか、という問題があるのです。「真宗門徒一人もあらじ」とは、宮谷法合氏ご自身を含めたところでの、慚愧であり、そして、今日の私にも厳しいお言葉として響いてくるのであります。

私たちがお内仏のお給仕を学ぶということは、ただお道具の置き方や、名称、お供えの仕方を学ぶということに留まることなく、お給仕、お荘嚴ということが、同時に人間の生き方の象りとして、形に表されているということを学ぶのです。つまり、形を通して人間とはいったい何だということに触れていく、その道筋が「真宗」であり、生きざまとなるのです。お内仏のお給仕をさせていただき、ご本尊に礼拝していく毎日の積み重ねのどこ

ろに、「真宗門徒」としての生きざまが表れてくるのでしょうか。

「真宗」とは

「真宗」は「真(まこと)」と「宗(むね)」と書きます。古来より、日本人は大事などころを「むね」と名づけてきました。家屋でも、一番大事などころを「棟(むね)」と呼びます。だから、家を新築した時には「棟上げ式」を行ないます。お寺で言えば上棟式です。人間の身体も同じく、最も大事な、中心となるところを「胸(むね)」と名づけられています。このように、「真」を最も大事な「むね」とするという生きざまを「真宗」と名づけられてきているわけです。

しかしながら、私たちは日々の生活のもっとも大事な「むね」となることを「真」といただいでいるでしょうか。辛いことや悲しいこと、思い通りにならないことが、数えきれないほど人生の中で起こってくるわけですが、そういう目の前の現実を「真」として頂戴しているかという、実はそうではないでしょうか。

私は、二人の子を授かりました。私がいつも、その二人の子が一生懸命生きようとしている、その「真」を見ようとしているかということです。実はそうではなくて、常に私のものさしで比較して見

ているのです。私の都合に合うか合わないかというところで見ているのです。さらに言えば、「私ほど子どものことを理解している者はおらん」と自負してしましたら、ある日息子から「お父さん、僕の気持ち考えたことあるの？」と言われてしまいました。それほど自分の都合、自分のものさしでしか子どもものことも、自分自身も見えていない、それが私たちの姿ではないですか。自分の都合だけを「むね」として生きていくのではないですか。

「真宗」なんて、ただの一度も生きたことがないのです。「宗（むね）」というのは本来、人間の生き方、人生の方向というものを決定してくるものなのです。しかし、教えを聞いていく中で、「自分の都合中心に生きていたなあ」と、我が身が照らされてくるということが、ある意味で「真」をいただくと言ってもいいかと思えます。

後ろ姿に学ぶ

次に、「門徒」ということですが、「門」というのは、教えの門です。親鸞聖人、法然上人、七高僧、お釈迦様をはじめ、南無阿彌陀仏を私にまでお伝えくださった方々の仲間入りをさせていただく門です。真宗という教えが、この「門」という一字に込めてあります。私たちはその

教えを生涯かけて学んでいく生徒という意味で、「門徒」という名をのりしているのです。教えを学び、目覚めの心を頂戴していく。これが浄土真宗の学びなのです。

こうして言葉を通じ、人と出会い、人と関わる中から真宗の教えを学び、目覚めさせていただくわけですが、それは人の後ろ姿を見させていただくということでもあります。教育というと、向き合ってからするものだと思われがちですが、これは違います。このことは、家の中や学校、または会社でも同じことが言えると思います。子どもはどこを見ているかと言えば、親の後ろ姿を見ている。だいたい親が言ったことや、面と向かって指示したことというのは、あんまり子どもは聞いていません。聞かなきやいけないから、聞いたフリはしていますけれど、子どもはずっと、親が何をしているか、どう生きているかという後ろ姿を見ているのでしょう。

お内仏の前に座るときには、皆が御本尊の方を向いて座ります。つまり、前に座る者は、後ろの者に背を見せ、後ろに座る者は前の者の背を見ることになりま。まさに後ろ姿です。背というのは、自分では見ることができないけれども、後ろの者にはよく見えているのです。だ

からこそ、私たちはお内仏のお給仕研修を受けて学んだことが、その後ろ姿に現れるようにしたいものですね。



まねごとがまことに

最後に、はらたみき原民喜という広島で被ばくをされた方の詩をご紹介します。さ

感涙

まねごとの祈り終にまこと化するまで、
つみかさなる苦悩にむかひ合掌する

『原民喜詩集感涙』より

私たちが、毎日お内仏のお給仕をして

礼拝するということは、最初はまねごとで始まった祈りかもしれないけれども、それを積み重ねていく中に、それが「真」となるという。人生の苦しみ、苦悩というものを、私の肩にきちっと荷なっていくということが、如來の「真」を頂戴することなのでしょう。「真宗」は、そういう教えであり、私たち一人ひとりがそういう身にさせていただけの教えです。その一日一日のたしなみということが、この詩に表現してあると思います、紹介させていただきます。

研究生感想

(文責編集部)

座談会の場で、参加されたご門徒さんから「今、お寺には変化が求められている。今までもおりでは若者は集まらない。もっと頑張ってほしい」と励まされた。行動を起こすことをためらっている私の姿勢を問い正していただいた。

第5期研究生 二村和敬

参加されたご門徒方の知識の多さ、関心の強さに驚かされた。日々の生活の中で私が当たり前のように流していることに対して質問をされてドキッとした。日頃から学んでおかなければならないと教えられた。

第7期研究生 加藤浄恵

研究員報告

第22回 平和展

2011年3月11日から18日まで、教務所1階議事堂にて第22回平和展（教化センター主催）が行われた。当展は、教化センターの研究業務（近・現代史の研究）の一環として行われており、センター研究員を中心に「平和展スタッフ」が4月より深めてきた学びの成果を発表する場として位置づけられている。今回のテーマである「歌と映画と戦意高揚」の展示について報告をする。

一、特別展
今回の特別展は漫画家森田拳次氏のご好意により、「漫画家の戦争体験」として森田氏の漫画を中心に展示した。森田氏は、いわゆる「満州引揚」の体験を持つ。戦時下の「満州国奉天」（現 中国瀋陽）の生活。敗戦体験・引揚体験の漫画が展示された。

この企画は、森田氏が名古屋別院で3



「戦争と流行歌」のパートでは、一般の歌謡曲も展示した。戦意高揚を目的として歌詞が募集される中、「出征兵士を送る歌」は最も応募者が多かった歌である。

月18日に勤まる「全戦争犠牲者追弔法要」の記念講演の講師になったことにより、実現した。展示品の貸与などの交渉や展示作業は別院が責任者となった。「平和展」としていえば、初めての別院との共同企画となった。

*

二、戦争と流行歌

1. 「レコード布教」

「真宗宗歌」（真宗各派協和会制定）に代表されるように、真宗大谷派の布教方

法に歌を利用したものがあつた。この方法は戦争協力を推進するためにも利用されていた。

大谷派は、「満州事変」下の1937（昭和12）年4月14日、「同朋箴規^{しんぺんぎ}」を発表した。これは三か条あり、「己を捨てて無碍の大道に帰す」「人生を正しく見て禍福に惑わず」「報恩の至誠を以て国家に尽くす」というもので、三番目の「国家に尽くす」が戦争協力を指す。これにより広げるために「レコード布教」が計画された。

その計画は、大谷智子裏方の作詞・歌唱により実現する。レコード化され、販売され、同朋箴規の内容を歌で広めたのである。「報恩の至誠を以て国家に尽くす」は、「みのりにあひし よろこびは 何にたとへん かたもなし 世にある限り君のため みくにのために つくさん」と歌われている。

2. 「殉国精神高揚」

アジア・太平洋戦争直前の1941（昭和16）年9月5日、「法主」は「挺身殉国の教書」を発表した。大谷派は、これ

についても歌で広めることを計画する。

『真宗』の1941（昭和16）年10月号には、先の「教書」とともに、「挺身殉国の歌」歌詞を募る」という広告が出されている。広く一般から歌詞を募集したのである。これは、歌そのものだけでなく、募集することでの盛り上がりも計算したものであろう。応募総数は不明であるが、一等と二等、そして佳作が三点選ばれており、一等は「挺身報国の歌」、二等は「挺身報国行進歌」として曲がつけられ、「修練」などを通じて広められていった。

当時、社会では軍や大政翼賛会だけでなく、新聞社・雑誌社による軍国歌謡の公募が成功していた。大谷派もその方法を取り入れたのであろう。



『無碍の道』は、裏方の独唱でレコード化された。全国販売することで、「同朋箴規」の精神を布教しようとしたことがわかる。

三、戦争と映画

1. 大谷派の映画

1937（昭和12）年7月7日、「満州事変」は日中戦争へと拡大した。当然大谷派の戦争協力にも拍車がかかることになる。

1938（昭和13）年1月13日、大谷派「法主」は、中国大陸へ日本軍慰問のため出発した。京都への帰着は3月9日。二か月にわたる慰問行であった。また裏方も1月30日から2月26日まで、「法主」とは別行程で慰問行を行っている。

この「法主」の慰問行は、大谷派製作のドキュメント映画『東洋平和の黎明』（皇軍感謝慰問の旅）として記録されている。

この映画は1938（昭和13）年6月4日に内務省の検閲が終わり、完成している。全10編（14巻）の無声映画である。全部で60分強と考えられる。内容は、「法主」の神戸港出発から始まり、中国「北支」、「満州国」、中国「中支」と行程のままに編集されている。

今回の「平和展」では、映画を「慰問行出発」・「大谷派と日本軍」・「大谷派の宣撫工作」・「大谷派の神道教育」・「風景」と分類し構成している。

2. 大谷派と日本軍

「大谷派と日本軍」では、中国済南の大谷派布教所での「日本軍戦没将士慰霊祭」の厳修（『朝日グラフ』より）、日本軍戦死者の遺骨を納めた「忠霊奉安所」の訪問。また最も「慰問」らしいものとして、軍病院の慰問を展示した。

そして注目されるのは、上海の日本軍「特務機関」訪問である。この「特務機関」とは、戦闘部隊ではない。占領地の占領行政を円滑に進めるための機関である。中国大陸での占領地では日本の宗教団体が、日本軍の占領地行政に協力するための「宣撫工作」を盛んに行っていた。そしてこの「宣撫工作」を指導・管理するのが、この「特務機関」であった。「宣撫工作」を行うための訪問であったと考えられる。

3. 大谷派の宣撫工作

その「宣撫工作」については、二種類の工作を紹介している。一つは日本語教育。中国「北支」の塘沽布教所の「協和日本語学校」訪問が紹介されている。日本

軍の傀儡を作るための人材教育は、まず日本語を習得させることにあったということである。そして北京に誕生した日本傀儡政権が経営する「北京青年訓練所」の訪問・見学。中国人を日本の協力者にする教育機関への訪問は、大谷派が「宣撫工作」を担う役割を持っていたことから、当然の訪問先だったのであろう。

最後に、「法要」を取り上げている。場所は占領直後の南京。法要は、「支那戦死者供養塔」の除幕式である。

南京は、占領直前、および直後にいわゆる「南京大虐殺」があった場所である。この地での「宣撫工作」は日本軍に

とつても重要であった。労働力の確保、物資の確保。そして反日活動の封じ込めは、武力に頼むだけでなく、「宣撫工作」も重要視されていたのであろう。「法主」の南京入りに合わせ、日本兵の供養塔ではなく、中国兵の供養塔が作られたのである。

日本兵の供養（慰霊）は、なにも僧侶でなくでもできる。南京では、神職による日本兵慰霊祭がおこなわれた。しかし神道は民族宗教。異民族の中国人の供養（慰霊）は僧侶の手によらなければならなかった。神職と僧侶、その戦争協力の役割分担が見て取れる。

4. 大谷派の神道教育

映画には、天津神社参拝が記録されている。神職の先導の下、「法主」一行が参道を歩く場面である。この場面上映することは、「神社参拝はするもの」と真宗門徒に対して教育・宣伝する効果があったと考えられる。中国での戦争協力は、その記録を見せることにより、国内でも教育効果をもたらしていたといえる。

（研究員 大東仁）



大谷派塘沽布教所の訪問。塘沽布教所には「協和日本語学校」が設置され、現地中国人に日本語を教授していた。日本軍の要請もあり、大谷派の宣撫工作活動の中心は「日本語学校」での日本語教育であった。（『戦争は罪悪である ある仏教者の名誉回復』NHK教育テレビ 2009（平成21）年10月12日放送）

教化センター ライブラリー紹介

A

森達也監督作品

1995年3月20日、東京都の地下鉄において、オウム真理教信者の手による無差別殺人テロが起こされた。この事件を契機に、マスコミはオウム真理教を毎日のように取り上げ、事件の全体像と、その背景となる教団の内情を繰り返し報道することになる。

地下鉄サリン事件の犯人と警察の捜査状況。教団に都合の悪い人間の口を封じるために行われていた多くの殺人事件。これらの事件を指示した一人の人間、オウム真理教教祖・麻原彰晃という存在。その麻原彰晃に従う信者の姿など。日々の報道により、私たちはオウムに関する多くの情報を得たはずである。

しかし、それらは事実の一面に過ぎないのではないだろうか？そして、私たちは得た情報をもとに、どうすればオウム真理教の一連の問題が解決するかと考えていたのか？どのような結末を望んだのだろうか？今回ご紹介する『A』には、私にこれらの疑問を生じさせるような映像が映されていたのである。

さて、本作品は監督の森達也氏が、当時28歳の若さでオウム真理教広報副部長としてマスコミの前に立ち、対応をする荒木浩氏と行動をとるに映像を撮り続けたドキュメンタリー映画である。それ故、『A』では非常に近い距離での信者の日常生活を見ることが出来る。食事風景や修行風景だけではなく、報道では決して見られなかった信者の笑顔や冗談な

ど。また、映画の主軸である荒木氏へのインタビューは会話のように進められ、そこで語られる彼の出家のきっかけや家族との関わり、広報副部長として社会と向き合う上で生ずる苦悩なども、見ていく興味のわくものである。

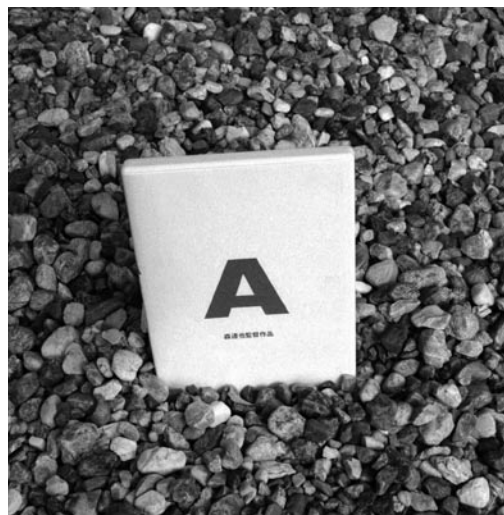
ただ、森達也監督は人々がオウムを見直すことを第一の目的とし、そのような場所から撮影をしたわけではない。見方によって、『A』はオウム真理教を擁護するための映画、もしくは、荒木浩という一人の青年が送った激動の日々を映した青春ドキュメンタリーとも受け取れる。しかし、そうではなく、地下鉄サリン事件以降に表面化された日本社会の問題を明らかにするために、オウムの内に入り、荒木氏を主軸として撮影する必要があったのである。

荒木氏と行動をとるしながら撮影をするということは、オウムに関わる外人達の姿を、荒木氏や他の信者の視点から映すということでもある。我々に少しでも多くの情報を伝えるために、熱心に荒木氏に食い下がるマスコミの姿。治安を守るためにオウム信者を見張る（職務を全うする）警察・公安の姿。そして、自分たちの身の安全を確保するために声を挙げる住民の姿など。

これらは今までの報道で見慣れたはずの風景だった。しかし、その視点を「外（日本社会）からオウムへ」ではなく「オウムから外（日本社会）へ」と変えた

けで、衝撃的な映像となったのである。マスコミも公安も、自身が為すべきことをしたにすぎない。だが、『A』に映し出された彼らの姿からは、「殺人テロ集団オウム」への恐怖と、その恐怖を除くための憎悪を強く感じるのである。治安のために行われた不当逮捕、身の安全のために叫ばれるオウム排除、それらの恐怖や憎しみを増長させるための報道。このような感情によって突き動かされ、一つの方向へと流されていく日本社会の危うさこそ、森達也監督が撮りたかったものだと、私は思うのである。

事実、『A』の撮影期間は地下鉄サリン事件後の1996年から1997年の約一年間であるが、その一年の間に日本社会はオウム信者を排除することによって問題の解決を図ろうとした。権力・法律（破防法）・一般の目など、作品中には信者への様々なアプローチが映されているが、人々が望むオウム信者の結末は一つなのではないだろうか。マスコミの前に広報副部長として姿を



1997年4月までの約1年間をかけて撮影された「A」は、自主上映という場を離れ、DVDとして1998年、一般に発売された。

ベルリン国際映画祭をはじめ、プサン国際映画祭などに正式に招待され、一定の評価を受けた。続いて「A2」が2001年に発売され、それぞれの本も出版された。2010年秋には「A3」が出版され、オウム事件を改めて捉えなおし、現代の日本の姿に警鐘を鳴らしている。

教化センターではDVDの「A」「A2」を貸し出ししている。

さらに、日本社会の憎悪を浴び続けた荒木氏は、『A』の中で「私が家に帰ったら、それで片付く問題だと思いませんか？」と問いかける。『A』に映された事実を考慮して言えば「問題は全く片付かない」である。どこへ言ってもオウム信者への監視の目は無くならないであろうし、場合によっては追い出される。オウム信者の排除が問題の解決とされる社会の中では、対話のテーブル（解決の糸口）すら作られないだろう。それ故、本当の意味で彼らが帰る場所など存在しない。また、社会はそのような場所を作らせないように動いている。

私自身、この原稿を書きながら、「オウムを弁護するつもりはないが」という前置きを入れたくなる。オウム信者の味方として見られることを恐れる。地下鉄サリン事件から16年経った今でも、問題は解決していないということであろう。

（教化推進要員 飯田真宏）

研究生実習報告

「過去の差別から、私の差別の問題へ」

― 真宗同朋会運動とは何か？

3月8日、真宗門徒講座「真宗門徒のくらしとつとめ」において、多くのご門徒さんの前で語る機会を得た。今回のテーマは「真宗同朋会運動とは何か？」というものであったが、同時に今年度の講座の総括を兼ねた最終回でもあり、私自身も「1年間を通して何を学んできたのか？」ということについて振り返る、大変良い機会となった。

「真宗同朋会運動とは何か？」というテーマは、私たち研究生の3年間という任期の間に与えられたテーマでもある。しかし私自身、これまで真剣に考える機会はない、正直言って無かった。それは「真宗同朋会運動」という言葉があまりにも漠然としていたために「何をもって真宗同朋会運動とするのか？」ということが、私の中で明確にならなかったからだ。

しかし、今回改めて真宗同朋会運動が発足するまでの歴史を学び直す中で、私は大きな思い違いに気付かされた。真宗同朋会運動とは「あなたは本当に真宗の

教えと出遇っていますか？」という問い掛けであり、願いだっただのである。誰かが明確な「答え」や「形」を与えてくれる、というようなものではない。それは私たち一人ひとりが自分自身に問い返し、見つけていくしかないのだ。

そしてそれは、今年度の真宗門徒講座で学んできたことと同じだった。この講座は1回1回の内容ごとに明確な「答え」が与えられるのではなく、そこに学びに来ている私たち自身に「あなたはどうかですか？」と問い掛けてくるものばかりだったのだ。

研究生としてお世話になって1年半。遠回りではあったが、今回の学びを通して、ようやく本当の意味でのスタート地点に立てたのではないかと思う。

(第6期研究生 寺西賢静)



名古屋教区解放運動 推進要員研修に参加して

研究生になり、名古屋教区解放運動推進要員研修に参加して差別の問題について学んでいます。

子供の頃、私は差別というものを感じることがなく、差別があるという事も知りませんでした。大学生になって同和教育という授業を受け、初めて差別というものを知り、同和地区と呼ばれていた所が自分の家から父親の実家へ行く途中に存在していたことを知りました。車の中から見る風景に、同和問題が隠されていたと衝撃を受けて以後、この解放運動推進要員研修に参加するまでは同和問題を一番身近な差別と考えていました。

真宗大谷派では戦後、同朋生活運動がスタートし、1962年同朋会運動が発足した。宗門をあげて差別という問題に積極的に取り組んでいる中で難波別院輪番差別事件、「中道」誌差別事件、全推協叢書「同朋社会の顕現」差別事件などの差別問題が起きました。浄土真宗という、共に歩もうとする同朋の間でさえ、気付かずに差別し傷つけていた現実があったのです。そして差別された人々から糾弾を受けたのです。糾弾者達は私達に

機心の深心という信心の課題について問いかけ、差別する者も差別される者も一人一人が尊い存在であり、独尊する人間であれと願われているのではないのでしょうか。また、そんな一人一人が独尊できる社会の実現こそが同朋会運動の趣旨ではないかと感じました。

講義では差別というものは、自分が差別の対象となる枠の外にいて、自分が差別されることはない安心できるものではなく差別がうまれてこない、と聞きました。私は、差別はあつてはならないことであり、また、使つてはならない言葉があるということも頭では分かっています。けれども、差別を受けた人の気持ちに思い至らなく、悲しみや哀れみといった目で見てしまっているのです。それは、差別されている人の独尊を認めず、枠の外からしか見ていなかったということではないでしょうか。私は車の中という閉ざされた枠の外から見、同和地区というものが物理的に一番近くに存在しているから、一番身近に感じる差別である勘違いしていたのです。今まで断片的な事実を見て、差別というものを傍観的に眺めていることしかしていなかったのではないかと思いました。

(第7期研究生 安部淳)

INFORMATION

自死遺族の分かち合い 「いのちの集い」

築地本願寺 聞法ホール 2011年2月24日(木)

本堂内は、慌ただしい都会とは別世界のように静寂であった。椅子に座ったまま、眠っている人もいる。お香の香りと煙が漂う中、私は正面の阿弥陀如来に手を掌させた。少しの間たたずんでいると「よく来たね」という声が聞こえてきそうなほど、その場がやさしく私を迎え入れ、包み込んでくれた。

会場には僧侶スタッフが10数名、大切な人を自死で亡くしてしまった方の来訪を待っていた。グランドピアノから流れる緩やかな旋律が、心を和ませてくれる中、1人、2人と参加者が集い始めた。

5分程度の法話の後、スタッフ2名を含む6人程の班に分かれてテーブルを囲んだ。参加者から、自らの思いを語っていただき、僧侶スタッフは「無言の行」と言われるほどに、ただ聞くことに徹していた。そして、参加者をご自身の気持ちをそのままに語ることできるよう、進行に努めるのであった。

すすり泣く声、自責の念を吐露する声、亡き人への謝罪の声、社

教化センターの研究業務「現代社会と真宗教化」の一環として、自死の問題に携わっている。この度、『自殺対策に取り組む僧侶の会』（超宗派有志僧侶）が主催する自死遺族の分かち合い「いのちの集い」に研究員が参加した。毎月開かれているこの集いは、大切な人を自死で亡くした参加者に、仏さまの前に座って、ゆっくりと“いのち”を見つめる時間を共に過ごしてもらいたいと願うものである。今回はその会の様子と見えてきた課題を報告する。

会に対しての憤りの声、他の参加者に同調し、励まし合うかのようなかすかな笑い声など、さまざまな声が聞こえてきた。1時間半ほどの分かち合いの後、当会代表から短い法話と挨拶があり、ご本尊にむかって手を合わせ、会は終了した。

会の終了後直ちに、スタッフ反省会が開かれた。沈黙を守っていた各スタッフからは、堰を切ったように活発な議論が交わされた。会の持ち方についての提案、反省などの意見交換の中、とりわけ「ただ聞くことに徹するならば、僧侶がこの場を開く意味があるのか?」との意見には、私自身も同感の念があった。しかしながら釈尊のようには対機説法ができない私がまずできることは「ただ聞く」「気持ちをそのまま受け止める」ということである。それはつまり、静寂な本堂で感じた「よく来たね」と包み込んでくれるような「場」に徹するということなのかもしれない。

(研究員 前田健雄)

教化センター日報 ■2010年12月～2011年2月

12月3日 研究業務・「自死者追悼法要」
(教化委員、別院と協力)
7日 HP「お東ネット」会議
10日 研究生・実習「真宗門徒講座」
13～18日 「真宗本廟御影堂御修復展」
(教務所、別院と協力)

2011年1月
17日 研究生・実習「別院報恩講参拝」
28日 教化センター報恩講勤修
11日 HP「お東ネット」会議
14日 研究生・実習「真宗門徒講座」
19日 研究業務・「平和展」学習会
(教化委員主催)
25日 研究業務・「現代社会における自死
について」学習会
26日 研究生・教化研修「伝道スタッフ養成講座」

28日 研究生・聖典研修(荒山淳センター主幹)
31日 研究生・実習「お内仏のお給仕研修」
2月4日 研究生・教化研修「伝道スタッフ養成講座」
8日 HP「お東ネット」会議
16日 教務所・教化センター報恩講
18日 研究生・実習「真宗門徒講座」
24日 研究業務・「現代社会における自死
について」調査
25日 研究生・特別学習「平和学習」
(教化委員主催・研究員出向)

公開講座にご参加ください(聴講無料)

◆聖教研修「『正信念佛偈』に学ぶ」※どなたでもどうぞ

講師 荒山 淳 (教化センター主幹)
期日 2011年4月14日(木)、5月13日(金)
時間 午後4時30分～6時
会場 名古屋教務所2階 講義室
テキスト 『正信念佛偈』(東本願寺出版部刊)

お見舞

東北太平洋沖地震により被災されたすべての皆さまに謹んでお見舞い申し上げます。
真宗大谷派名古屋教区教化センター

—— 東北地方太平洋沖地震災害救援金のお願い ——

真宗大谷派では、このたびの災害に関する救援金を下記の口座にて募っております。
皆様のあたたかいご支援をお願いいたします。

加入者名 真宗大谷派宗務所 財務部(救援金)
郵便振替口座 01030-4-2244

(注意) 振込用紙の通信欄に「東北地方太平洋沖地震 災害救援金」と明記くださいますようお願いいたします。

《編集者雑感》

3月11日、東北で大地震が起きた。それは平和展開会式の直後であった。どうにか平和展を閉会し、ここに報告できたことで、素直にほっとしている。また、震災はちょうど今号の編集を行っている時であった。急遽巻頭言を震災に関するテーマに設定し直し、原稿を差し替えた。

その日はまた、御遠忌オープニングを迎える前日でもあった。救援金が募られ、御遠忌(第一期)が中止となり、「被災者支援のつどい」と銘打った法要が被災者支援として行われることになった。

いても立ってもおられず、本山に集う。同じ気持ちで1面の原稿を差し替えた。宗祖の前に身を据える時、宗祖は一体何を呼びかけてくれるのだろうか。(C)

■教化センター

〈開館〉

月～金曜日 10:00～21:00

土曜日 10:00～13:00

(日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)

〈貸し出し〉

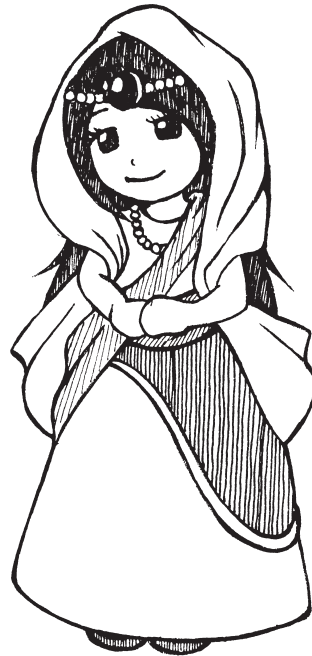
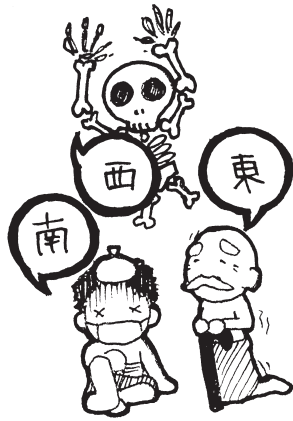
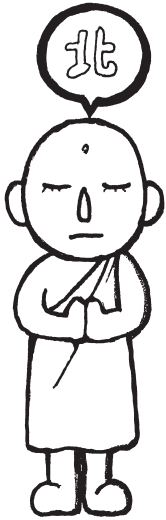
書籍・2週間、視聴覚・1週間

～お気軽にご来館ください～

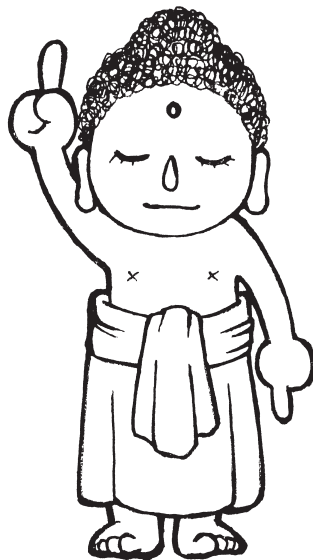
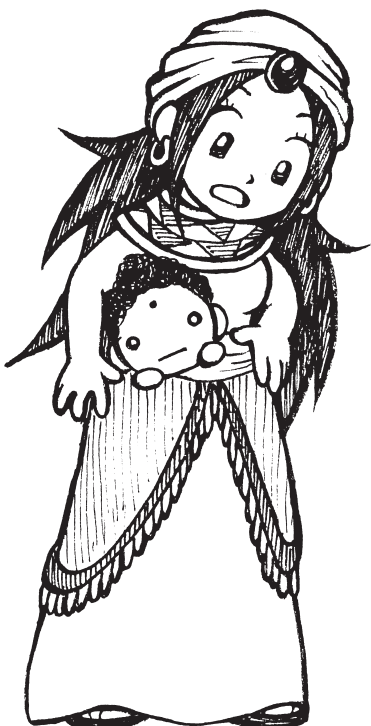
お釈迦様の生涯

寺報イラストカット集

寺報やチラシなどにお使いください。



釈尊伝



釈尊伝



お釈迦様の生涯